

ロロ・ビルマ語比較研究における問題

西 田 龍 雄

Some problems in proto Lolo-Burmese

by

Tatsuo NISHIDA

ま え が き

1967年 Robbins Burling は *Proto Lolo-Burmese* と題する書物を出版した。¹⁾ 本稿は、この書物の批判を通じて、ロロ・ビルマ語群の比較研究についてのいくつかの問題を論じたものである。

I ロロ系言語とビルマ系言語

アカ語とプノイ語をはじめて比較研究の対象として取り上げたのは Robert Shafer であった。²⁾ Shafer はこの二つの言葉がロロ語とビルマ語の link をなす点で興味をもった。³⁾ 1952年に発表した “Phonétique historique des langues lolo”⁴⁾ では Shafer は対象を拡張して、ビルマ文語、Phunoi 語、Akha 語、Gni lolo 語、Lolopho 語、Phu-pha 語、Weining lolo 語、Oulou lolo 語⁵⁾ を含めた形で Lolo 系言語とビルマ語の比較を扱い、126の単語についてビルマ共通態 (birmanois) と称する形式を設定した。この論文は、資料の貧弱さ—Lolopho 以下の言葉にはごく断片的な語彙しかわかっていない—から来る欠点が目立ったが、Shafer の示した主旨自体はすぐれたものであった。

Lolo 系の言語は、子音体系には無声音系列と有声音系列の対立があるが、つねに CV タイ

1) Robbins Burling, *Proto Lolo-Burmese*, International Journal of American Linguistics, Vol. 33, No. 1, pt. II, 1967. 101pp.

2) Robert Shafer, “The link between Burmese and Lolo,” “Phunoi and Akha Tones,” *Sino-Tibetica* No. 2, 4, Berkeley, 1938 (mimeographed). Shafer は Henri Roux が “Deux tribus de la région de Phongsaly,” *BEFEO*, 24, 1924 で提供したアカ語とプノイ語の語彙を使った。

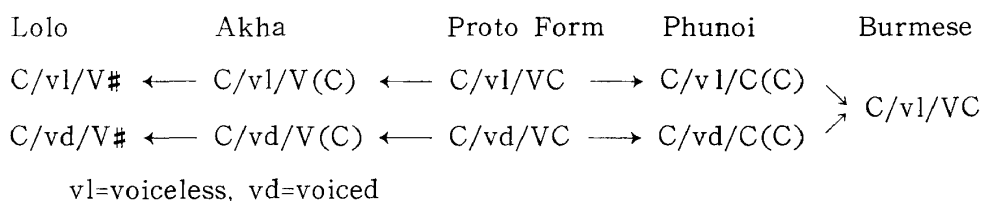
3) Shafer は、はじめはこの二つの言葉がどこに分類されるかわからなかったが、研究しているうちに、これはビルマ語とロロ語の link をなす重要な言葉であることがわかってきたという。

4) *T'oung Pao*, Vol XLI, Leiden, 1952. pp.191-229.

5) Ahi lolo, Lolopho は Liétard の資料により、Phu-pha, Weining (威寧), Oulou は, Mission d'Ollone の報告書 “*Langues des peuples non chinois de la Chine* (Paris, 1912) にもとづいている。

プの音節をとって、母音は末尾子音と結合しない。ところがビルマ語は母音と末尾子音の結合を許す CVC タイプをとる反面、子音の体系には、少数の例を除いては無声音に対立する有声音の系列が保存されていない。したがって、この二つの言語の特徴を補い合わせると共通態の形式が自然に出てくる。⁶⁾

Shafer は、共通態の形式は CVC であって、C- には無声出気音対無気音の対立のほかに、有聲無気音の系列があったことを予想し、その系列がロロ系言語では保存されたが、ビルマ系言語では無声音化する方向をとり、一方 -VC の結合形式はビルマ語系では保存されたのに対して、ロロ語系では -V# 形式に変化する方向に進んだ、そして、その中間的な段階を示すのが、Phunoi 語と Akha 語であると考えた。これを図示するとつぎのようになる。



これは基本的には極めて妥当な構想であった。しかし、ここでこの構想の根拠になる二つの事柄が問題になる。第1に、ロロ系言語の初頭の有聲音系列が、はたして共通態の形式を保存しているのだろうか。第2に、ビルマ書写語ですき間の多い -VC 形式 —— たとえば -ak, -ang, -at, -an はあるが -ik, -ing, -uk, -ung はない⁷⁾ —— が、はたして共通態の -VC 形式を代表していると認め得るだろうか。

第1の問題は Shafer がロロ系言語の有聲音がチベット語の有聲音にあたるところに妥当性を求めた。たとえば “manger” M. bri. tsa | Phunoi tsa | Akha tsa | Gnilolo dza | Ahilolo dzo | Lolopho dzo | Phu-pha dza | Oulou dzu | V. bod=Tibetan za

あとの問題は、Shafer の研究からは解答を得ることができない。Shafer はつぎの20の共通形式を設定したが、あまりかんばしいものではなかった。1) -a, 2) -ă, 3) -i, 4) -ui, 5) -ay, -ai, 6) -ei, 7) -o, 8) -au, 9) -ak, 10) -at, 11) -ik, 12) -it, 13) -ip, 14) -ok, 15) -ut, 16) -añ, 17) -am, 18) -oñ, 19) -iñ, -in, -iN⁸⁾, 20) -im.

これからみると、Shafer のビルマ共通態はビルマ書写語よりもずっとすき間の多い体系をとり、-n に終わる -an, -in, -un は扱われず、-ap, -up, -ong < *-uŋ, -ok < *-uk が共通形式として存在すべきか否かもわからない。一方、Shafer はビルマ書写語で、単に声調の区別を正書法に反映した -ay の2通りの書き方を、機械的に -ay と -ai に置き換えて、必要の

6) 拙稿「ビルマ語とロロ語」『東南アジア研究』第1巻第4号、1964を見られたい。

7) このすき間については、拙稿「ビス語の系統(続)」『東南アジア研究』第4巻第5号、1967, p.56を見られたい。

8) この -N は -ñ になったり -n になる nasal を指す。(Shafer. T.P. p. 211)

ない共通形式の区別を認めたりした。⁹⁾

第2の問題は Shafer 以前にすでにそれを考えている人があった。それはチベット語との比較から出発して、その周辺の言語に傍証を見出した Wolfenden である。Wolfenden の主な目標は音素体系の比較研究にあるのではなくて、古代ビルマ語 (old Burmese) が失った -VC 形式の一部をチベット語・マル語などと比較して復元するところに置かれていた。Wolfenden の意見は極めて示唆に豊んでいる。¹⁰⁾

まず出発点はずぎの事実にあった。ビルマ語の声調には 1) ok myit (ここでは -³ で表記している), 2) se pok (ここでは -² で表わす), 3) normal category (ここでは符号を付けずに表わす) の三つの範疇があるが、この se pok にあたる形がもともとは末尾子音をもっていたことをチベット語との対応関係から明らかにできるという。たとえば Bur. khu² (Wolfenden の khui:)¹¹⁾ “to steal” は本来末尾音 -n をもって normal cat. にあったが、その -n が消失して、その結果として se pok の範疇に移った。チベット語の rkun-ma “thief” と rku-ba “to steal” の存在から、それを証明できるという。いまこの関係を私の方式で書き改めると、つぎのようになる。

Burmese	earlier stage		later stage		Tibetan
tone	normal cat.		se pok cat.		
	-VC	→	-V# ²	:	-VC
					-V#
“to steal”	*khu ⁿ	→	khu ² -	:	rkun-ma
					“thief”
					rku-ba
					“to steal”
“to eat”	*tša ⁿ	→	tša ² -	:	gzan-pa
					“food”
					za-ba
					“to eat”
“to borrow”	*khyi ⁿ	→	khyi ² -	:	skyin-pa
					“a loan”
					skyi-ba
					“to borrow”

また、-n のほかに -ń 形式もつぎの例で考え得るという。¹²⁾

	Bur.	Tibetan
“frog” *pha ⁿ	→ phal’ → pha ²	: sbal
“loins” *kha ⁿ	→ khal’ → kha ²	: mkhal-ma

9) いまではアカ語・プノイ語は Shafer が考えたような単なる Link language ではなく、ロロ・ビルマ語群の有力な要員として認めるべきである。

10) 最初の意見はずぎの論文に見える。“On ok myit and she pok, with a proposed revision of the terminology of burmese tones,” *JBRs*, Vol. 19, 1929.

11) 以下のビルマ語表記は、統一をとるためと、印刷の便宜を考えて、とくに差支えのない限り、私の方法に改めた。

12) これにはチベット語が -l で対応するから -l’ を仮定し、さらにその来源形として -ń を設定した。

同様に ok myit またはいわゆる入声の範疇から, se pok への移動も, またあとづけることが可能である。

Burmese	earlier stage	later stage	Tibetan
tone	checked cat.	se pok	
“to wash”	*khyut →	khyu ² :	hkhrud-pa, hkhru-ba
“string”	*khrut →	khru ² :	rgyud
“to be bad”	*tšhuuk →	tšhu ² :	btsog-pa “unclean”
“bone”	*rut →	a-ru ² :	rus-pa

se pok の声調の中に, 古代ビルマ語が失った末尾子音がかくされているという意見は, たしかに注目すべきであるが, 上掲のようにチベット語に -V# と -VC 形式が並存する点に, なお検討するべき余地があった。意味の対応からみれば, Bur. khu²- を Tib. rku-ba に比較したほうがずっと適切であるにもかかわらず, なぜ, ビルマ語の khu²- をチベット語の rkun-ma に対応させるのであろうか。これには Wolfenden の word family による比較研究という立場が背後にあった。¹³⁾私は他のチベット語の研究家とともに, この -n, -d は実はある機能をになった古い接尾辞であったと考えている。¹⁴⁾

このような出発点から Wolfenden は第2の段階に進んだ。¹⁵⁾ビルマ書写語に認められる大きなすき間は, 文字で表記されるようになった11世紀以前にすでに一部の末尾子音が脱落してしまった結果であるが, それを親族言語の形式から復元できるとして, -u, -i 母音につづく dental または palatal の子音を, Type A, B, C に分けて考察した (表記法は私の方法にしたがう)。

Type A Bur. -u = T. -ud (e.g. B. phu : T. sbud “bellows”)

Type B Bur. -we = T. -ul (e.g. B. ŋwe : T. dñul “silver”)

Type C O. Bur. -iy = T. -id (e.g. B. siy to die : T. gšid¹⁶⁾ “funeral”)

Type A は 上掲の to steal, bone などの Bur. -uをもつ形式にあたるが, これにはマル語 -uk カチン語 -ut が対応する。

	Bur.	Maru	Kachin
“bone”	a-ru ²	šă-ruk < *-ut	n-rut
“to steal”	khu ²	kuk < *-ut	khut

13) 拙稿「チベット・ビルマ語語彙比較における問題」『東方学』15輯, 1957.

14) たとえば J. A. Durr, *Morphologie du verb Tibétain*. Heidelberg, 1950, p.64-, p.170-, また拙稿「チベット語動詞構造の研究」『言語研究』33号, 1957, p.28 を見られたい。

15) Wolfenden, “On the restitution of final consonants in certain word types of Burmese,” *Acta Orientalia*, 17, 1938.

16) 正しくは, Bur. siy “to die” には Tib. śi-ba “to die” をあてるべきである。これも Wolfenden が word family を背景として形式の並行性を求めていった弊害である。

マル語の -uk は -ut から来源し、消失した古代ビルマ語 -VC 形式は、-uts であったと推定している。(Bur. -uts > -u, Maru *-ut > -uk)

この type の単語として、bone, steal のほかに、smoke, to wash, string, to dye, to be bad, to weep, breast, bellows, to cover, to swallow, to thrust in の例をあげた。

Type B ビルマ語形 -we は、-ül に復元でき、-ül はより古くは -ün であった。-ül から -we への変化は、中央チン語のライ方言などと並行しているという。silver, snake, hair of the body, to spit, to fall off (as leaves) をこのタイプの単語と考える。

Type C 古代ビルマ語の -iy は -t に近い末尾音をもっていたことは疑いが少ないが、これにはマル語の -it まれに -et が対応するから、消失した古代ビルマ語形を -its とするという。water, to write, grandchild, to give, to die, urine, tobacco, to clean の例をあげる。

Wolfenden は -ats に対する -VC 結合として、上述の type A に -uts を、type C に -its を推定した。この推定にしたがうと、ビルマ語の変化の一部をつぎのように書き表わせる。

old Burmese		Myazedi (11th)		later stage
-ats	>	-atš	>	i?
*-uts	>	-u	>	ou
*-its	>	-iy	>	ei
*-un > -ul	>	-uy	>	wei

Wolfenden は最後に末尾子音 -ń についてふれている。この -ń は -ŋ に復元でき、先行母音の鼻音化をあらわしていたという。しかし母音がどのような性質であったかは述べていない。

	Bur.	Maru	Tibetan
“name”	a-mań	mań	miŋ < myiŋ
“to be long”	hrań	krań	riŋ-ba
このほかに			
“to be ripe”	hmań ³	mań	smin-pa
“liver”	a-sań ²	sań	mchin-pa

の対応があるから、ビルマ語でももとの -n を -ń に入れ替えた可能性があったと考える。つまり、ビルマ語では -ń > -ń と -n > -ń > -ń の二つの変化があったことになる。これは、Wolfenden があくまで、チベット語形をより古い形式と考えた結果であった。

Wolfenden の推論にはなお多くの検討が必要であり、また取り扱った範囲はかなり限定されてはいたが、ビルマ語の -VC 形式が原初形態をそのまま伝承するものではないことにもっとも早く気付いていたと言える。しかし、Shafer は上掲の論文において Wolfenden の研究にまったくふれていない。

これらの問題をより進んで探究し、ビルマ・ロロ言語を全般的に扱っていくためには、新しい資料が要求された。そのような要求に応じるかのように出版されたのが中国の学者によるロロ系言語についての一連の成果であった。

撒尼彝語、阿細語、哈尼語の資料を使って、私は1958年に、ロロ語とビルマ語の比較研究を試み¹⁷⁾、1964年にとくに声調の比較によってロロ語ニ一方言、アヒ方言、ハニ語、リス語とビルマ語の間の規則的な対応関係と共通形式の設定を行なった。¹⁸⁾ しかし、なお本当の意味でのロロ系言語とビルマ系言語の中間的な性格を示す、ラフ語・アカ語の信頼できる資料はなかった。幸いに1964年秋から65年にかけて、タイ国北部で実現した言語調査は、ビス語・リス語・アカ語・ラフ語（シー方言とナ方言）の新しい資料を私に与えてくれた。¹⁹⁾ 一方で1959年秋から60年にわたって、ビルマ・カチン州で調査したマル語・ラシ語の語彙を使った比較研究が出来上がりつつあった。このような時期に Burling の *Proto Lolo-Burmese* が手許にとどいた。²⁰⁾

Burling はその著書で、ビルマ語、マル語、アチ (Atsi) 語、リス語、ラフ語、アカ語を取り上げているが、アカ語を American Baptist Mission in Burma の Paul Lewis の資料によっているほかは、すべて著者自身がビルマにおいて収集したものであった。Burling は Acknowledgement でつぎのように言っている。“ラングーン大学の学生の中には、ビルマのいろいろの言葉の話手が多くおり、彼らは単に協力的であったというよりは極めて物わかりのよいインフォーマントであった。アカ語のほかは、ここで私が使う資料はそれらの学生から集めたものであり、少なくとも既刊の書物からとったときでも、彼らによって確かめてみた。”したがって、著者は、ここでまったく新しい資料を提供したことになる。²¹⁾

17) 拙稿「西夏語の数詞について—その再構成と比較言語学的考察」『石浜先生古稀記念東洋学論叢』1958.

18) 上掲「ビルマ語とロロ語」

19) それについての報告はつぎの諸論文の形をとっている。「タイ国北部の言語調査について」『東南アジア研究』3 卷 3 号1965, 「アカ語の音素体系」『音声科学研究』IV, 1965/66, 「ビス語の研究」「ビス語の系統」「ビス語の系統 (続)」「リス語の研究」「リス語比較研究 I」「リス語比較研究 (続)」『東南アジア研究』

20) Burling のこの系統の言語の研究には、つぎの論著がある。A *Garo grammar* (Deccan College monograph series : 25, Poona 1961 ;) “Proto-Bodo,” *Language* vol. 35, No. 3, 1959 ; “The addition of final stops in the history of Maru (Tibeto-Burman),” *Language*, vol. 42, No. 3, 1966; “A problem in the phonology of Lahu,” *Artibus Asiae*, Essays offered to G. H. Luce Vol. 1. 1966.

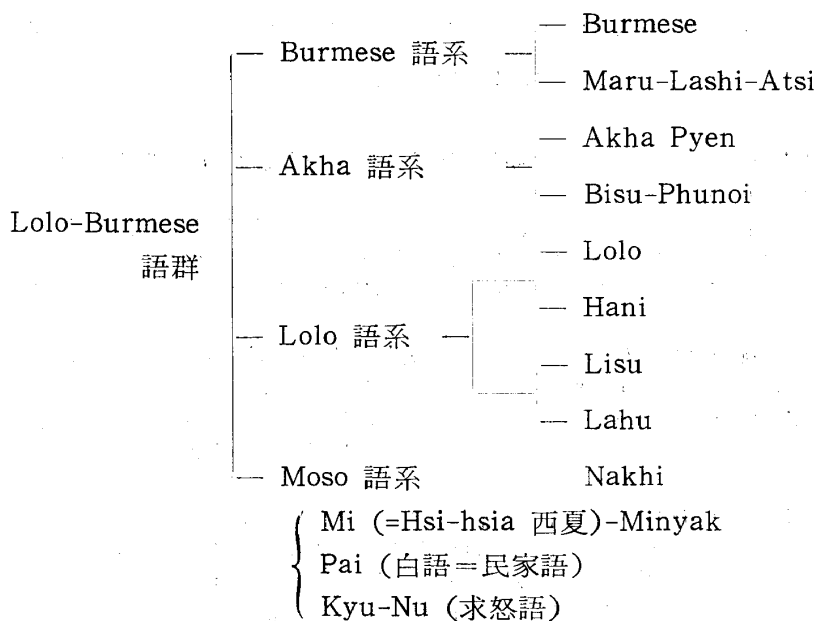
21) いまの状態ですぐこれに近い資料を集めるのは困難であろう。その点この書物は一つの寄与であるといえる。再び同じインフォーマントについてこの資料をチェックすることは不可能に近いから、この書物に対する批判は、1) この資料の中でうまく論理がたっているか、2) 他の資料を使った場合でも、その論理体系がまったくくずれることがないかの2点にしばられるであろう。

本稿で、Burling の考えを批判すること自体が、私の 目的ではない。*Proto Lolo-Burmese* は、この系統の言葉の研究史の中で一つの価値をもつであろう。ただ私の意図は、この書物への批判を通じて提出できるロロ・ビルマ語比較研究におけるいくつかの問題を論じることにある。

II Burling の構想と筆者の構想

Burling は、この書物の冒頭でつぎのように言う。“このモノグラフの作成には長い間かかった。私がはじめて、ロロ語とビルマ語を比較するという考えを構想したのは、私が Fullbright 計画でラングーン大学の講師をしていた1959年のことであり、むしろ突然に気付いたものであった。”1959年には、上に掲げた R. Shafer の第2の論文もすでに *T'oung Pao* 誌上に発表されており、マル語とビルマ語の関係については、Wolfenden のすぐれた論文で明らかにされていた。Burling がそれらの研究を全く知らなかったとしたならば、それは不覚と言うべきであろう。その上、Burling がそこでロロ語とよんでいるものは、リス語、ラフ語、アカ語の3言語であって、それらをロロ・グループの三つの代表形とみなした。しかし、この三つはロロ系言語の主流を占めるものではない。ロロ系言語は、中国で彝語とよばれるロロ語(324万人)、リス語(30万人)、ハニ語(13万人)、ラフ語(14万人)から成りたち、その主流は雲南・四川・貴州に分布し六つの方言をもつ彝族の言葉であると、私は考える。したがって、厳密に言うならば、その彝語を対象に加えなければ、ロロ語の比較研究にはならない。

そこでこの系統の言語の比較研究にはまず Lolo-Burmese の subgrouping が問題になるであろう。Burling は全体をどのように構想しているかを言明していないが、筆者は、今の段階では、つぎのように分類している。



この Proto Lolo-Burmese 共通形式の最終的な設定は まだまだ早期であると思う。ビルマ語系アカ語系とラフ語やリス語の体系だった比較研究は、かなり近い将来には信頼できる段階まで到達するであろうけれども、それとロロ語系の主流をなすロロ語・ハニ語との比較研究には、なお多くの困難がよこたわっている。Proto Lolo-Burmese の共通形式は、それらの諸言語をすべて包括した性格をもたねばならないから、その目標に到達するためには、つぎのような段階が必要になる。

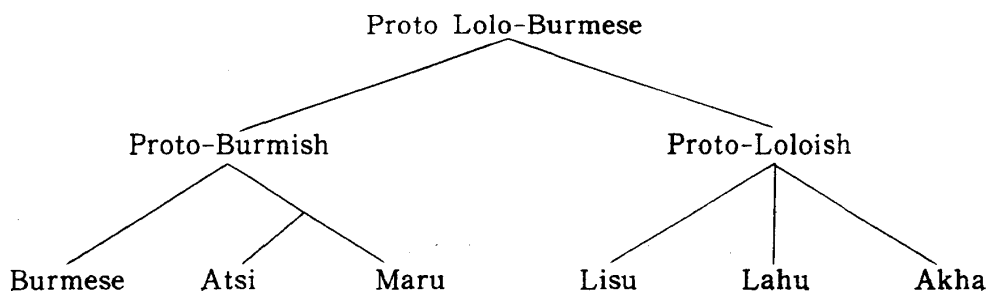
- | | |
|------------------------------------|--------|
| 1) Burmese-Marui-Lashi-Atsi 語の比較研究 | step 1 |
| 2) (Burmese) Akha-Bisu 語の比較研究 | step 2 |
| 3) (Burmese) Lahu-Lisu 語の比較研究 | step 3 |
| 4) (Burmese) Lolo-Hani 語の比較研究 | step 4 |
| 5) Proto Lolo-Burmese | step 5 |

1. はビルマ語系, 2. はアカ語系, 3. はロロ語系 1, 4 はロロ語系 2 の解明であり, 1 から 4 までの結果を総括して, さらに minor 言語による修正を経て, はじめて第 5 の step に到達できる。そこで, Mi-Minyak, Pai, Kyu-Nu との比較を試みるべきであろう。この原初形式を設定する過程において, この言語群の中で, もっとも長い歴史ともっとも豊富な語彙形式をたくわえているビルマ語を一つの基準として取り上げるのは妥当な操作であると思われる。

Burling は, このロロ・ビルマ語群の中から, さきにあげたように, ビルマ語系のビルマ語・マル語・アチ語と, アカ語系のアカ語, ロロ語系のラフ語・リス語を対象として, ナキ (Nakhi) 語, ロロ語は, 資料に信頼性がないという理由で, ここではしりぞけている。

この書物は, 六つの言葉の音素体系の簡単な記述とその比較研究から成り, 著者は記述研究よりもむしろ比較により力を注いだ。この著者の目標もこれら六つの言葉の音素対応関係の定立と六つの現代語の体系を十分に説明できるような共通形式の設定にあった。

Burling は Lisu-Lahu-Akha から設定した形を Proto-Loloish (ロロ祖形) とよび, Bur.-Atsi-Marui から推測した形を Proto-Burmish (ビルマ祖形) とよんだ。そして, その両者をまとめた段階を PLB (Proto Lolo-Burmese) (ロロ・ビルマ祖形) と称した。この関係をつぎのように図示している。



Proto Lolo-Burmese の形式は、音素の体系、語彙の体系、文法の体系について、言語間の変動をもっとも理解し易い方式で説明できるものでなければならない。私はすでに発表した数編の論文の中で、音素体系の変動と語彙形式の異動をとり扱った。後者は、表現される意味の親近性と表現する形式の並行性に焦点をおいて、追求してみた。Burling の書物の批判に入るまえにここで音素構造の一部について、類型的に言語間の変動をいかに考察できるかを述べてみよう。²²⁾

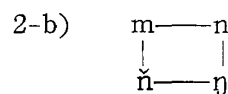
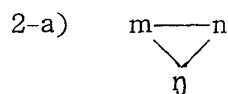
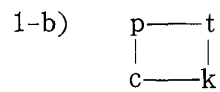
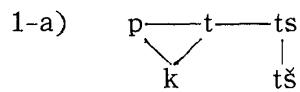
ロロ・ビルマ語群に属する言葉の音節形式は、CV# あるいは CVC₂ のいずれかである。さらにこの C- は単純子音のみに限られる言葉と単純子音と子音結合の対立を認める言葉の二つに分かれる (C-:CC-)。-C₂ は例外なく単純子音であるが、-p, -t, -k, -m, -n, -ŋ (ときに -tʃ, -ŋ が加わる) のセットをもつ言葉と閉鎖音と鼻音 -N と zero -# の対立もしくはそれに類する単純な対立しかもたない言葉に大別できる (-C(単):-C(複))。

V にも、C- と同じように、単純母音のみの言葉と単純母音と母音結合の対立をもつ言葉にわかれ (V:VV), さらに単純母音は、緊喉音と非緊喉音の対立をもつか否かによって 2 分類される (緊:非緊)。

いまこれらの基準にあてて、ロロ・ビルマ語群の言葉を分類すると、つぎのようになる。

	Anc. Bur.	Maru	Akha	Bisu	Lisu	Lahu	Lolo	Hani	Hsi-hsia
CV:CVC ₂ (±)	+	+	+	+	+	+	-	-	+
C-:CC-(±)	+	+	+	+	+	-	-	-	+
-V:-VV(±)	-	+	-	-	+	+	-	+	-
-C ₂ (単):-C ₂ (複)(±)	+	+	-	+	-	-	×	×	-
緊喉:非緊喉(±)	-	+	-	-	+	+	+	+	+

また C- の位置にある単位を、さらにくわしく、音素の具体的な対立様式を基準に分類することも必要になってくる。たとえば、かりに



22) 類型的な考察として、私の方法とは異なっているが、E. J. A. Henderson, "The typography of certain phonetic and morphological characteristics of South East Asian languages," *Indo-Pacific Linguistic Studies*, part II, 1965, pp.400-(*Lingua* 15) は十分参考になる。

3-a) p——ph

3-b) $\begin{array}{c} p \text{---} ph \\ \diagdown \quad \diagup \\ b \end{array}$

4-a) m——n

4-b) m——n : hm——hn

といった基準で特徴づけてみると、各言語の性格はつぎのようになる。

	Anc. Bur.	Maru	Akha	Bisu	Lisu	Lahu	Lolo	Hani
1	b	a	a	a	b	b	a	a
2	b	b	b	b	b	b	a	a
3	b	b	b	b	b	b	b	a
4	b	a	a	b	a	a	a	a

もしも煩雑さをいとわないならば、この種の基準をなお多数に広げていくことが可能である。

いま私が一見つまらなく見える類型的な分類をあげたのは、言語の体系間の異同をもっとも明瞭に提示できるのが、類型的な表示であり、このような類型的にあらわれる差異が、なぜ同一系統の言語間に生まれてきたか、それを説明するのが比較言語学の主要な目的の一つであると考えからである。

Burling は、比較の基準を 1. C. initial consonant or cluster, 2. V.VC final, including both vowel and any final consonant, 3. T tone の三つにおいて、C- の位置にある音素体系に見られる言語間の異動をつぎのような方法で説明した。まず PLB の初頭子音の最大可能表 (large majority) をあげる。(p. 6)

	P	PY	T	NY	TS	C	KY	K
S ₁	ph	phy	th		tsh	ch	khy	kh
S ₂	p [?]	p [?] y	t [?]		ts [?]	(c [?])	(k [?] y)	(k [?])
S ₃	p	py	t		ts	c	ky	k
N ₁	m	my	n	(ny)				ŋ
N ₂	m [?]	m [?] y	n [?]	n [?] y				ŋ [?]

この表の特徴は、閉鎖音を S₁ S₂ S₃ と標しづけ、鼻音を N₁ と N₂ に分けることと、P T K と TS C それに PY KY NY を軸にしたことである。そして、この横列と縦列の組み合わせが、当該言語でいかに合一しているかを説明すれば、その言葉の体系の成立を解明したことになる。たとえば S₁ S₂ S₃ で代表される初頭音にはマル語・アチ語ではつぎの音素があたる。

	P	PY	T	TS	C	KY	K
S ₁	ph	phy	th	tsh	ch	khy	Kh
S ₂	p [?]	p [?] y	t [?]	ts [?]	c [?]	k [?] y	k [?]
S ₃	b	by	d	dz	j	gy	g

さきの表で示唆された対立は、すべてマル語・アチ語にある。六つの現代語の中でもっとも多い単位をもち、もっとも複雑な体系を示すマル語・アチ語とさきの表が一致しても当然である。したがって、マル語とアチ語では、共通態の横列と縦列の組み合わせが、そのまま保存されたと言える。ただ ph pʔ b の扱いに問題がでてくる。マル語では p- と pʔ- の対立がなく、ph- pʔ- b- 3者の対立のみであると、pʔ- のもつ glottalized という feature は p- の中に負わせることができる。そして、マル語は $\begin{array}{c} p \text{---} ph \\ \diagdown \quad \diagup \\ \quad b \end{array}$ (上述の 3-b) のタイプをとるとしたほうが、ずっとわかり易い。ex. pít “to shut”, phík “waist”, bí “to give”

ところが Burling は、この3者の対立を ph pʔ p として表記した。すると、マル語の子音には voiceless と voiced の対立がなく、glottalized の feature が子音の弁別を荷う結果になった。これは、個々の形態素についての対応関係においても、また明瞭な効果を示さなかった。Burling がまとめた S₁ S₂ S₃ の各言語間の対応関係は、つぎのようになる。

	Burmese	Maru Atsi	Lisu	Lahu	Akha
S ₁	vl. asp.	vl. asp.	vl. asp.	vl. asp.	vl. unasp.
S ₂	vl. asp.	vl. glott.	vl. unasp.	vl. unasp.	vl. unasp.
S ₃	vl. unasp.	vl. unasp.	voiced	vl. unasp.	voiced
	voiced			voiced	

この表はマル語・アチ語の S₂ を vl. unasp. に、S₃ を voiced に、アカ語の S₁ vl. unasp. を vl. asp. に改めるべきである。S₃ は voiced の系列であることがわかるが、そのほかに、ビルマ語とラフ語には、S₁ S₂ S₃ のいずれにも属さない voiced がのこる。Burling は、これをつぎのように解釈する。この voiced は、ほかの言葉と規則的な対応関係をもたないから、ビルマ語とラフ語で、のちに閉鎖音と破擦音に限って、新しい有声音の系列を加えたためであるという。はたして、事実はそうであろうか。まずラフ語の有声音を検討しよう。Burling の比較語彙にあたってみると、(1) Lisu voiced : Lahu voiceless : Akha voiced の規則形のほかに (2) Lisu voiced : Lahu voiced : Akha voiced の例が実際にある。

	Burling				Nishida ²³⁾		
(1)	Lisu	Lahu	Akha		Lisu	Lahu	Akha
“ascend”	dâe	táʔ	dāʔ				
“come out”	dôlā	tóʔlā	dôʔlā	iva)	doh-ʔah	tǝ-e-ve	do-fiw
“bee”	byà	pê	bya	iiia)	biàh	a pēh	bjà
“thin”	bà	pâ	bà	iiia)	bàh-ʔah	páh-ve	jo-bà

23) 拙稿「リス語比較研究 I」 p. 24-25, Rule 3 を見られたい。

(2)	Lisu	Lahu	Akha		Lisu	Lahu	Akha
“dig”	dù	(dû)	dù	ivb)	dỳh-ʔah	dúh-ve	dù-fiw
“drink”	dō	(dō)	dó	ivb)	do-ʔah	dòh-ve	dó-fiw
“full”	bî	(bî)	byōm	iiib)	bíh-ah	bih-ve	

Burling は (2) を不規則形と考えて、いずれもかっこに入れたが、これは明らかに別の一つの規則的な対応系列をなしている。対応関係を書き改めて、

a) Lisu voiced : Lahu voiceless : Akha voiced

b) Lisu voiced : Lahu voiced : Akha voiced

とし、a) を *voiced, b) を *voiced² と表示すればいちおう解決はできる。ただ a) b) を分けた具体的な条件はなお明らかではない。

一方、ビルマ語の有声音は、もともと中位の位置で起こった有声音化が、第2次的に初頭で起こったものであり、その条件ははっきりしないが同化作用によって出て来たと Burling は考えている。しかし、Burling があげている有声音の例は、もし中古ビルマ語形あるいは文語形を採用するならば、問題にはならない。²⁴⁾

	Sp. Bur.	Anc. Bur.		Sp. Bur.	Anc. Bur.
“between”	jâ	a-kra ²	“ginger”	jîn	khyaq ²
“dove”	jôu	khyu ²	“horn”	ûjôu	u ² khyu
“owl”	gín	khaŋ pup	“shrimp”	băzún	puzwan

ビルマ語とラフ語にあるこれらの有声音を除外して、Burling は S₃ の共通形式を、無声無気音で代表させた。上掲例, “ascend” ta², “bee” pya², “dig” tu², “thin” pa², “full” pyiŋ³

これらの単語には、リス語とアカ語で有声音が対応するから、この形式の設定は、Burling がリス語とアカ語の有声音をも original なものではなく、*t->d-, *p->b- などの変化によって起こったものと認めたことになる。しかし、この認定は事実には合わない。S₃ の共通形式を無声無気音とするのは、マル語・アチ語の対応形にもとづいているからである。いま、私の資料と照合すると、S₃ にあたるマル語の形式は、実際には、有声音と無声無気音の二つに分かれる。代表的な例をあげると、

	Maru	Akha	Ane. Bur.
(1) “dig”	táo	dù	tu ² -
“bee”	pyó	bjà	pya ²
“tooth”	tsôe	×	tšway

24) しかし、中古ビルマ語がもつ有声音はどのような性格のものであるかは、なお探求の余地がのこされている。

(2) “disappear”	byâu	bjo-fu	pyok
“bridge”	dzén	dzím	×
“to give”	bí	bì-fu	piy ² -
“to be straight”	dèn	jo-do	tañ ³
“language”	dón	dò	×

少なくとも、この(2)の系列に属する単語は、共通態で有声音にはじまったと考えるべきであろう。マル語における有声音と無声音の分裂は、出気音について認められる出気音と無気音の分裂と並行しているから、その解明にはマル語の方言調査をまたなければならない。

Burling が S₁ S₂ とする代表形は、つぎの対応関係を示している。ここでは軟口蓋音を例にしよう。

		Bur.	Atsi Maru	Lisu	Lahu	Akha		
	S ₁	kh	kh	kh	kh	kh	*kh	
	S ₂	kh	kʔ	k	k	k	*kʔ	
		PLB	Bur.	Atsi	Maru	Lisu	Lahu	Akha
S ₁	“bitter”	kha²	khâ	khó	(khó)	khwà	khâ	yōxà
	“foot”	khyə	chéi	khyí	khyit	×	ḳḥ̄s̄ē	àkí
	“horns”	khyo	(ûjóu)	khyúi	(khyù?)	×	ǎkh̄	×
	“smoke”	kho²	khôu	myì khàu	mì khúk	mù khù	mî khô	ùxø
	“steal”	kho²	khôu	kháu	khúk	khù	khô	xø
S ₂	“bark”	kʔok	khauʔ	sikkʔuʔ	×	×	×	×
	“branch”		ǎkheʔ	ǎkʔoʔ	ǎkʔoʔ	×	×	×
	“dry”	kʔyok	chauʔ	kʔyuʔ	ǎkʔyok	×	×	×
	“mosquito”	kʔyaŋ	chín	kʔyáŋ	kʔyà	×	×	×

S₁ *kh の実例は、全体 16語のうち、リス語 3 例、ラフ語 8 例、アカ語 8 例、そのうち k- をもつ単語は 3 例、ほかの 4 例は x-, 残りの 1 例はかっこに入った (g-) である。S₂ の例は、全体 6 例のうち、ビルマ語とアチ語がそれぞれ 6 例(そのうちビルマ語 1 例はかっこに入る)、マル語 3 例、リス語・ラフ語・アカ語の対応例はない。それ故、この軟口蓋音に関しては、S₁ と S₂ の弁別は、ビルマ語の kh- に、アチ語・マル語で kh- が対応するか k[?] が対応するかにすべてがかかっている。いま上掲例を、私の形式に入れかえるとつぎのようになる。

	Bur.	Maru	Lisu	Lahu	Akha
(1) “bitter”	kha ² -	kho-	khua- ² ah	kháh-ve	jo-xà
“foot”	khriy	khyì	tshùh-	khíh	² a-khú
“horns”	u ² khyu	khyôu	² úh tshu	ô-khǒ	² ù tshóé
“smoke”	mi ² -khu ²	khôu	mùh-khùh	mǒh-khóh	² ù xòé
“steal”	kh ² u ² -	kháu-	khùh- ² ah	khóh-ve	xòé-fiú
(2) “bark	a-khək	-kháu ²	ku-dzu	ô xih kǔ	baxo
“branch”	a-kwɛ	-kàun	-káh	ô-kǎ	
“dry”	khɾək-	khyâu ²	dzùh pýh	×	jo-gu
“mosquito”	khraŋ	kyòn	dzuh- ² ah	tshâ kǒ	×

この例からみても理解できるように、対応関係の変形がすべて共通形式の相違を反映していると認めていくなれば、共通態における弁別単位は非常に大きい数になる。私はつぎのように考えたい。Burling の方式を修正すると、S₂ と S₃ は、少なくともそれぞれ二つに分けるべきである。(軟口蓋音を例とする)

	Bur.	Maru Atsi	Lisu	Lahu	Akha	
S ₁	kh	kh	kh	kh	kh, x	*kh
S _{2a}	k	k	k	k	k	*k
S _{2b}	kh	k	k	k	kh	*kh ₂
S _{3a}	k	k	g	k	g	*g ₂
S _{3b}	k	g	g	g	g	*g

もちろん、この図式でもあり得る対応関係をすべて網羅するわけにはいかない。このほかに、たとえば

	Bur.	Maru	Lisu	Lahu	Akha
“to fall”	kya ³	kyò	kje- ² ah	tšei-ve	ga-fiú
“star”	kray	kyì	ku-zà	mɿ kì	² a-gú

がある。このリス語形式またはアカ語形式を同源異語幹形式として処理することも可能である

25) “mosquito” Akha bù thé は Nyi-lolo 語の by tshɿ と同源形式である。

が²⁶⁾、いまは基本的な対応関係（この例は S_{3a} に属する）に、無声音化という特徴がリス語に加わったものと解釈したい。いずれにしても、問題は Burling の $S_1 S_2 S_3$ では片付かない複雑さをもっていることは事実である。

つぎに、Burling は、初頭音と母音の間に制限された結合関係をもつ単位として、 $-y-$ と $-w-$ のみを認め、 $-y-$ を初頭 cluster に、 $-w-$ を母音の labialized on glide を形成するものとして扱った。これには、 $-y-$ 、 $-w-$ のほかに $-l-$ $-r-$ を認めないことと共に、多くの疑問がのこる。共通態の cluster の設定は、中古ビルマ語形に多くを負わねばならないが、私は $-l-$ 、 $-y-$ 、 $-w-$ 、 $-r-$ の4種を副次音とする cluster を認め、つぎの四つの変化様式にあてはめている。²⁷⁾

- 1) 副次音を保存する。たとえば $ky-$ 、 $py-$ 、 $by-$ がのこるタイプ
- 2) 音素結合が affricate に変わる。たとえば $khr-$ が $tsh-$ になり、 $gr-$ が $dz-$ になるタイプ
- 3) 主核音を脱落させて、副次音を主核音とする。たとえば $kl-$ $ml-$ が $l-$ に、 $kr-$ $gr-$ が $r-$ になるタイプ
- 4) 副次音を脱落させる。たとえば $kr-$ が $k-$ に、 $phl-$ が $ph-$ になるタイプ

Burling は、たとえばつぎの $kr-$ $khr-$ $phl-$ $ml-$ $mr-$ を、いずれも $-y-$ として再構成する。

	Nishida	Burling		Nishida	Burling
“between”	*kra	PLB kya	“foot”	*khriy	PLB khyə
“white”	*phlu	PLB phyu	“to be high”	*mraŋ ³ -	PLB m ² yaŋ
“grandchild”	*mliy	P-B myei			

しかし、Burling が掲げた語彙対照表において、かっこに入れて $kl-$ $tl-$ $thl-$ $sl-$ を再構成している例も少なくない (pp. 71-)。

- 26) Burling も、かなりの単語について同源異語幹形式を認めている。たとえば “thorn” を、ビルマ語系とロロ語系にわけて、

	Bur	Atsi	Maru	
Proto Burmish	tsu ^{2c}	sû	tsù	tsàu
		Lisu	Lahu	Akha
Proto Loloish	tshu ²	tshù	á chû	×
	Bur.	Lahu		
*tshu	tshu	a-tshú		
	Maru	Lashi	Lisu	
*dzu	dzao	dzu	-dzuh(?)	

- 27) 拙稿「リス語比較研究 I」p. 35.

		Nishida	Burling
kl-	“buffalo”	*klway	(klwe)
	“stone”	*klok	(klok)
	“sugar cane”	*kram	(klu)
tl-	“sparrow”	*tša	(tla)
	“vulva”	*tšok	(tlok)
sl-	“eight”	*hrac	(slit)
	“tongue”	*hlya	(sla)
thl-	“rice”	*tšhan	(thlan)
	“tear”	*tšhut-	(thlut)
	“wash”	*tšhiy-	(thlei)

ことに、hl- hr- に sl- を与えたり、tš- tšh- に tl- thl- の来源形を考えることは、少なくとも、ここでは不都合であると思う。しかも、著者のあげる音韻対応表には、PLBにもP-Bにも、この -l- を含む cluster はいっさいなく、tl- thl- は tsh- ts- ts²- としているから、これらの cluster の再構形はなおいっそう理解できない。

Ⅲ -VC 共通形式設定についての問題

ロロ・ビルマ共通態の -VC 形式の設定は、はじめに述べたごとく、中古ビルマ語の -VC 形式のすき間を復元できるか否かの問題が中心であった。換言すると、ビルマ系言語とロロ系言語を比較して設定できる共通態をビルマ語の -VC 形式が代表できるかどうかに関心があつた。しかし、期待に反して、Burling が提供したつぎにあげる Proto Lolo-Burmese の -VC 形式は、中古ビルマ語とはずっとかけ離れた極めて不均整な体系であった。

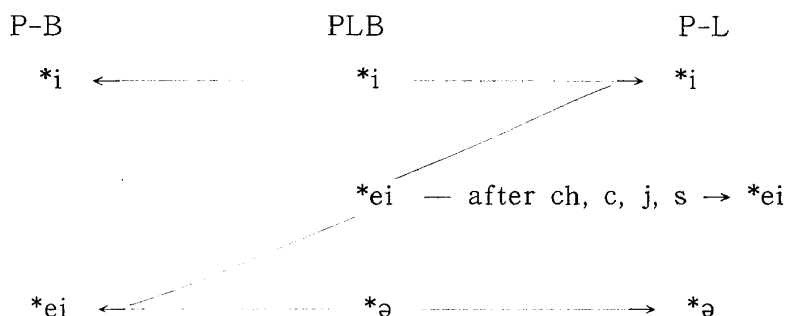
i		(it)	(ik)				iŋ
(w)e	(w)ei						
(w)ə							
(w)a	ap	at	(w)a ²	(w)am	(an)		aŋ
o			ok				oŋ
u	up	ut		um	(un)		

全体で22種、かっこに入れたのは、P-B (ビルマ祖形) にのみ再構成できて、P-L (ロロ祖形) にはできないことを示している。²⁸⁾

28) p.68 では (ap) (oŋ) がかっこに入り、e と we が分離して、23種になっている。

PLB の -VC 形式が中古ビルマ語よりずっと すき間の多いこのような 不均衡なものとはどうしても考え難い。一方, P-B 共通態で区別する ik it は共にビルマ文語の -ac に対応し, 共通形式としての弁別は, おそらく必要としない。Burling は Atsi it : Maru at が対応する, “eight” *slit, “love” *cʔit, “root” *myit, “seven” *nʔit に *-it を, Atsi ik : Maru ak が対応する “bamboo shoots” *mik, “chillic” *phyik, “joints” *tshik, “new” *sik, “shoot” *pik, “tree” *sik には *-ik を設定する。しかし アチ語・マル語の末尾閉鎖音は, 極めて不明瞭であって, -it と -ik が実際に弁別されるべき単位かどうかはかなり疑わしい。²⁹⁾

さて, このような不均衡が生じた原因の追求は別にして, Burling が設定した共通形式の妥当性について検討しよう。それには言語間の対応関係の認定が正しいかどうかが問題になる。まず Burling の PLB *-ei, -i, -ə をめぐって論じてみたい。Burling は言う。P-B *-ei は, 例が多く非常に安定した形式であったが, ロロ語で種々の母音に対応するため, PLB に三つの弁別単位, *i *ei *ə を補設 (hypothesize) する必要がある。P-B では -ei, -ə の対立が合一し, -ei と -i の対立になり, P-L では, -ə はのこったが -ei は破擦音のあとでは -ei に, そのほかでは, -i と合流したと言う。この主張は, つぎの表をみるとよく理解できる。



残念ながら, この対応関係は成立し得ないと思う。以下それを証明しよう。

Burling が設定する PLB *-ei が P-L -ei と P-L -i に分裂する条件は, 初頭音 ch- c- j- s- につづくか否かにあるが, 後者に属する単語は, 実際には “anvil” と “give” の 2 例に限られる。しかもこの 2 例は, ロロ系言語ではラフ語のみが対応形式をもっている。

	Lisu	Lahu	Akha
“anvil” P-L (bi)	×	pītē	×
“give” P-L (bi²)	×	pî	(bi?)

一方, Burling の P-L *ei は, つぎの対応関係の代表である(p. 51)。

29) Atsi 語は a. i. u. e. o の 5 母音システムをもち, a. u. o には -t が, i. e には -k がつく。心 nîk, 樹 sek, 着る vut, 殺す sat (声調表記は省略) cf. 程黙「載瓦語簡介」『中国語文』53, 1956.

	Lisu	Lahu	Akha
1 のあと	i	対応例なし	対応例なし
c, ch, j, s のあと	ɯ	ɨ	i
その他	ə	i	i

上の分裂条件から云えば、P-L *ei の 1- のあとの形式とその他の場合の形式は P-L* *i に属させるべきである。

リス語で 1- 初頭音のあとで i があらわれる例は、“boat” lʔei と “heavy” lei の 2 例に限られ、それにあたるラフ語・アカ語の対応形式はあげられていない。しかもその他とあるリス語、ə: ラフ語・アカ語 i には実例がない。したがって、P-L *ei は ch, c, j, s のあとの Lisu ɯ: Lahu ɨ: Akha i と、それに対する上掲閉鎖音のあとの “anvil” “give” と 1- のあとと、そして nasals のあとなどに認められる対応形 Lisu i: Lahu i: Akha i の二つに分けるべきである。私の形式で後者の対応例を提出するとつぎのようになる。

	Burling	Nishida	Lisu	Lahu	Akha	Bur.
“boat”	P-L lʔei	*hliy	-lǎh	×	×	hliy
“heavy”	P-L lei	*liy ²	lǎh-ʔah	×	×	liy ² -
“day”	P-L ×	*ñiy-	ñih-	ô nih	ñi-	niy ³⁰⁾
“earth”	P-L mi	*mliy-	mih-	mǎh-	mí-	mriy
“give”	P-L (bi ²)	*biy ² -	gǎh-ʔah	pǎh-ve	bì-flu	piy ²
“anvil”	P-L (bi)	*biy	?	?	bi-	piy

このように考察すると、PLB *-ei から P-L *-i と P-L *-ei への分裂が成立しないのみならず、さらに進んで、Burling の言う PLB *-ə と PLB *-ei がはたして弁別的な単位であったかどうかともたいへん疑わしくなる。Burling によると、PLB *-ə は、P-L *-ə にあたり、つぎの例のように、Lisu ə: Lahu ə: Akha ɨ の対応形をもつ。

	P-L	Lisu	Lahu	Akha
“copper”	gə ²	?	k̚ə̃	gɨ
“foot”	k̚ə̃ ¹	?	k̚hə̃sə̃	àkí
“untie”	phə̃ ¹	phə̃	phə̃	pí

これを上掲 P-L *-ei と対照すると、

30) 「ビス語の系統」では “day” Akha ʔa-non をあてたが、ここでは ñi so “tomorrow” にのこる ñi- に対応形を改める (p. 64)。

	Lisu	Lahu	Akha
P-L *-ei	i ɯ	i i	i
P-L *-ə	ə	ə	i

になる。

しかし、この両者は補い合う関係にたっていて、後者の対応を示すのは、Cr-cluster を初頭音とする音節であった。Burling が共通態に Cr-cluster を認めないのは、ここでも不都合になってくる。それ故、P-L *-ei, P-L *-ə は共に一つの -VC 形式から来源したと考えて差支えない。“copper” *kriy, “foot” *khriy, “untie” *phriy には、上掲 “anvil” *biy, “heavy” *liy etc と同じ -VC 形式を設定できる。

Burling が P-B *-wei とする “blood” swei, “dog” khwei, “snake” mwei などは、中古ビルマ語形 -uy に対応するから、これはやはり -ei とは別の系列とすべきであろう。私はこの両者を -uy と -iy の2形式で弁別する。

以上の論証は、PLB *-i, *-ei, *-ə の3単位の対立は成立せず、PLB *-i: PLB *-ei に帰納でき、この共通形 -ei は、中古ビルマ語形にしたがって、-iy と -uy に改めるべきであるという意見に到達した。

Burling の研究が、明らかに失敗の部分を含んでいることはすでに明瞭である。その最大の原因は、ビルマ語の歴史についての知識を比較研究の上にまったく適用していない点にあった。比較研究において、当該言語の文献上検索できるもっとも古い形式を考慮するのは常識である。この言語群の比較研究でビルマ語形がもっとも重要視されてきたのもそのためであった。ところが Burling がここで用いるビルマ語形は、すべてビルマ口語形であった。いわゆる正書法を転写するとか中古ビルマ語の形式を採用する方法をとっていない。口語形式を用いるのはつぎのような意見によっている。“ここで先入観にとらわれないように、私はこの書物でわざとビルマ語の書写形式を考慮しないことにした。そして話し言葉の形式のみを使った。私の再構成形と書写形式を比べることがそのおかえしになるだろう。再構成がはじめて正書法を判定するための基準を提供するからである。”その意図は、現代語による比較研究の結果が書写形式と一致するかもしれないところにあった。しかし、上に述べたように、書写形式を使わなかったことが、対応関係の一部を不明瞭にし、共通形式の設定に対して大きい不備をもたらしてしまった。

Burling の -ei -wei を -iy -uy とすべきほか、Burling があげる原初形式には、中古ビルマ語形を根拠にして多くの修正が必要である。-it, -ik は -atʃ に、-iŋ は -aŋ に替わるべきであり、-o と -ok, -oŋ は原初形式でも当然別の単位の母音を含んでいた。-o は中古ビルマ語 -u に、-ok -oŋ は、-ɔk, -ɔŋ にあたる。[ex. “bone” xo² (Nishida a-ru²) “smoke” kho² (-khu²), “below” ok (ʔɔk), “disappear” pyok (byɔk), “pound” thoŋ² (thɔŋ²-), “wing” toŋ (dɔŋ)]

ビルマ語の書写形式 -ip, -im は中古ビルマ語 -ip, -im に遡るが、この共通形式の設定には、決定的な基準がない。Burling は、これを PLB -up -um にかえて、つぎのように扱う。

“to sleep”	PLB	yup	P-B	(yup)	P-L	yu?
“house”		yum		yum		(yum)

この -VC 形式をもつ単語は、多い数ではないが私の対応例に改めると、つぎようになる。

	Bisu	Akha	Lisu	Lahu	Bur.
“sleep”	jù-ŋɛ	ju-ŋu	jih-tá	zɛ-ve	?ip
“house”	júm	ńm	h̃ih	zêh	?im
“to be low”	h̃num-	jo-ńm	×	nêh-ve	nim ³ -se
“cloud”	×	m̃m d̃m	×	×	tim
“potato”	plùm	bjm̃-ma	bih	pêh-sĩ	*prim-?u

もっと簡単に語系ごとの対応関係を示すと、

Bur.	Maru-Lashi	Akha-Bisu	Lisu-Lahu	Lolo
-ip	-ap	-u -u	-i -ɛ	-i
-im	-am	-m -um	-i -Eh	-ɛ

となって、共通形式が -ip か -up か -im か -um かの決定は極めて困難である。Burling がこれを -up -um とするのは、根拠のある操作ではあるが、共通態における -VC 形式を中古ビルマ語形式よりもさらにすき間の多い体系に変えてしまったことになる。私は、この共通形式を -ip -im としておきたい。これらの問題は、今後いくつかの step を経た段階で、あるいは決定的な判定根拠を見つけ出せるかも知れない。

あ　と　が　き

以上、Burling の成果に対して、いくつかの批判を提出した。言語の比較研究は、どのような資料を用いるかによって、大いに左右される。出発点として、基礎的な資料の整理とその記述研究の態度が、いかに重要な影響を与えるかがはっきりとわかった。ことにリス語とかラフ語のようないわゆる allophone の多い言葉では記述研究においてどの phone とどの phone を allophone と認めるかは、比較研究における操作を性格づけることになる。たとえば -i 母音は tš- tšh- dž- につづき、-u 母音は ts- tsh- dz- と結合する場合、tš- tšh- dž- を対立単位として扱い、-i -u を allophone と認めるよりも -i -u 母音を弁別単位として、tš- tšh- dž- と ts- tsh- dz- を一つの音素の allophone であるとしたほうが、その言語の記述

がより簡潔にいくと認めざるを得ないにしても、その言葉を比較の対象の一つに加えるときには、そのような記述の条件を熟知していなければ誤った方向に導かれる恐れが多分にある。このような逸脱を出来る限り回避するためには、より古い形式を残している言葉を比較の中心にたてる必要があった。上述の PLB-i. -ei. -ə の弁別, cluster の認定などの Proto Lolo-Burmese の重要な問題は、中古ビルマ語の形式を除外しては成立し得ない。筆者が既発表の論文で述べたよりくわしい -VC 形式の設定, cluster の処理は、Yale 大学の Matisoff の研究とともに³¹⁾, Burling の操作に替り得る一つの議論である。しかし、それらの正否は、比較の範囲を拡げて最終の段階において検討されなければならない。

付 記

ビルマ語の -V# 形式の一部に、マル語の -VC 形式が対応する一連の単語がある。本稿のはじめに述べたように、Wolfenden は、このマル語の 性格を、古形式の保存に由来すると考えたが、Burling は、それとは反対に、この末尾子音をのちに付け加えられたマル語特有の閉鎖音と推測した。Burling の対応図式をあげるとつぎのようになる。

P-B	Bur.	Atsi.	Maru	Nishida
*-ei	-ei	-i	-it	*-iy
*-o	-ou	-au(*yo>ui)	-uk	*-ui

この二つの母音のあとに限って、末尾音 -t -k の添加現象が起こった。

		P-B	Bur.	Atsi	Maru
ex.	“dung”	khyei ²	(chî)	khyi	khyit
	“dye”	tsho ²	shôu	tsháu	tshúk
	“earth”	myei ¹	myéi	(mikûŋ)	myit
	“mushroom”	mo ^{1a}	(hmóu)	mâu	mùk

このように、この事実をマル語における添加現象と認めるならば、これらの言語間のトーンの対応を簡単な方法で解釈できると Burling は言う。

ビルマ語・アチ語・マル語の声調の対応関係は、つぎの I, II, III に分けて設定できる。

I 開音節単語のトーンの対応関係

1	Burmese	/	Atsi	へ, /	Maru	＼	low (open)
2		へ		＼, /		—	mid. (open)
3		＼		＼/		/	high (open)

31) James A. Matisoff, “Lahu and Proto Lolo-Burmese,” 1968, mimeographed.

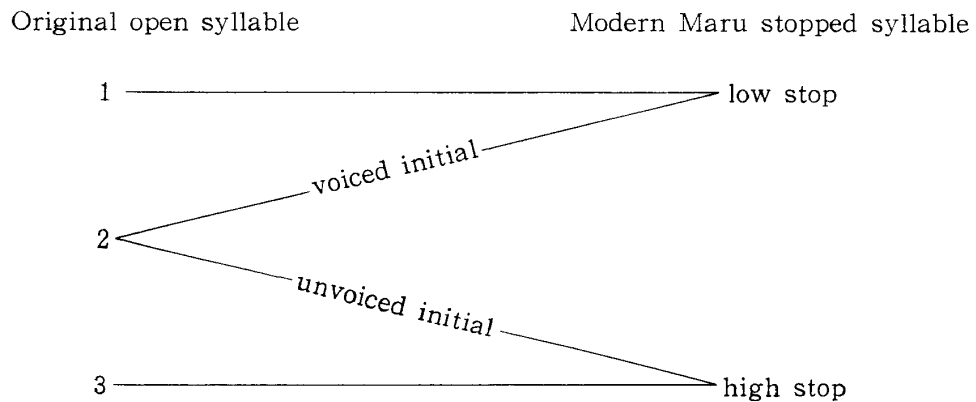
II 閉音節単語のトーンの対応関係

	Atsi		Maru
unvoiced initials	high stop	:	high stop
voiced initials	low stop	:	low stop

III P-B *-ei, *-o を含む単語の対応関係

1. Bur. / : Atsi へ , / : Maru low stop
 3. \ : \ / : high stop

I では初頭音の性格の違いが条件にはならないが、II は初頭音の有声、無声の相違によって分裂する。III は明らかに I に属する性格を示しているから、ビルマ祖語の三つの開音節トーンが特別の母音について出てくる場合に、mid. トーンが分裂して、現代マル語の二つの閉音節へと規則的に発展したとみなせる。³²⁾



以上の Burling の解釈は一つの解答ではあるが、このマル語の末尾閉鎖音の問題は、実際には、マル語の方言調査をまたなければ解決できないと筆者は思う。そしてこれは、声調の対応関係のみならず母音の緊喉・非緊喉の特徴とも密接な関係をもっている。

32) Burling, "The addition of final stops in the history of Maru (Tibeto-Burman)," *Language*, Vol. 42, No. 3, 1966. はもっぱらこの問題を取り上げている。